

聖書:第一列王記17章17~24節

説教:あなたの息子は生きています

はじめに

イスラエルはソロモンが死んだあとまもなくして北王国と南王国の二つの国に分裂し、それぞれが独自の道を歩み始めます。前回は、そのうちの北王国に目を向け、異教の神々を拝んでいたアハブ王のところにあるときエリヤという預言者が遣わされアハブに向かって、「私のことばによるのでなければ、ここ数年の間、露も降りず、雨も降らない」と語ったところから見ていきました。アハブが拝んでいたのは五穀豊穡を約束するバルという神でしたから、雨が降らないと言うことは、真っ向から挑戦状をたたきつけたのと同じ。当然いのちを狙われる。そこでエリヤはケリテ川のほとりの逃れ、およそ六ヶ月間鳥に養われるという訓練を受けた後、今度は異邦人の地であるツアレファテの町に遣わされ、薪を拾いに来た貧しい女性を見つけて、「ほんの少しの水を持って来て、私に飲ませてください」と声をかけます。この会話がきっかけとなって、この女性が実は夫を亡くしたやもめであり、飢饉のために食糧が手に入らない。いま最後の食事をしたら小さな一人息子とともに死のうとしていたことを語りはじめます。それを聞いていたエリヤは、「あなたの家のかめの粉は尽きず、その壺の油はなくならない」と約束し、実際にそのようになっていった。これが前回までのあらすじです。

1 エリヤ

1) 「私が世話になっているやもめ」

今日の箇所を読んで戸惑う方も多はずです。このやもめはエリヤのことばに従って神の奇蹟を目の当たりにし、信仰者になったのではないか。またこの女性は夫を早くに亡くし、息子だけを生きがいにしてきた。それなのに、なぜ神はこの母親から無慈悲に息子を取り上げるようことをされるのか。この疑問をはっきりさせなければ、私たちは安心できません。

エリヤはどうしたのでしょうか。母親から息子のからだを受け取り、屋上の部屋に上り、このように祈ります。20節。「私の神、主よ。私が世話になっている、このやもめにさえもわざわいを下して、彼女の息子を死なせるのですか。」

エリヤがこのやもめの家に世話になることになったのは、自分が無理にお願いしたからではありません。エリヤがまだケリテ川で訓練を受けていたときに、神があらかじめ定めていたことでした。居候すると言うことだけでも大変な負担をかけて申し訳ないと思っていたのに、その上なぜ息子が死ななければならないのか。これは神の義に反することではないのか。エリヤはそのように訴えています。

2) 「あなたの息子は生きています」

そうしてから、「私の神、主よ。どうか、この子のいのちをこのこのうちに戻してください」と祈ると、神はその願いを聞かれて、その子は生き返りました。エリヤは生き返った子どもを抱きかかえ、屋上の部屋から下の家に下りてきて母親に渡します。「ご覧なさい。あなたの息子は生きています。」

それで私たちは「よかった」と喜びます。しかしよく考えるとわからないことがある。子どもが病気になる時母親もエリヤも祈ったはずだ。なぜそのときは祈りには応えずに、なぜやもめが苦しむようにしたのか。

3) なぜ

このことは、私たちの心の深いところにある神に対する疑問を呼び覚まします。「どうして信仰者は苦しみにあうのか。」

このやもめのことを見れば、神は私たちを苦しめて楽しんでいるようにしか見えない。でも、そんなはずはないでしょう。神は私たちを罪という悲惨な状態から救おうとされ、そのためにひとり子さえも私たちのところへ遣わす方です。であれば、やもめの息子が死ぬことに何か大切な意味があると考えなければなりません。いったい苦しみにどんな意味があるのでしょうか。

2 やもめ

1) 「今、知りました」

そのことを考えるために、24節をもう一度読みます。「今、私はあなたが神の人であり、あなたの口にある主のことばが真実であることを知りました。」

やもめはどのような所を通ってきたのでしょうか。エリヤから「まず私のためにパン菓子を作ってく

ださい」と言われたとき、迷ったけれどそのとおりにしました。この母親と息子が食べる分はもう何もありませんから、死を覚悟したでしょう。ところが、エリヤにパン菓子を渡してからもう一度家に戻ってみると、かめの粉も油も一杯に満たされていた。それを見た瞬間、これで助かった、死ななくてもよいと喜んだ。それで神を信じたはず、と私たちは考えた。でも24節を読むとどうですか。主のことばが真実であることを、いまやっと自分は理解できた。そう語っている。これはどういうことでしょう。

2) 苦しみにあうことの意味

かめの粉が尽きず、壺の油がなくならない。こんな奇蹟を見せられたらどんな人でも聖書の神を信じるだろうと私たちは思うわけです。でも、それが毎日続いたらどうでしょう。最初の頃は「ありがたい、感謝します」と言っていたのに、日が経つうちにあるのが当たり前になります。

皆さんは、救われた時のことを覚えていますか。私は、うれしくてまるで天にも上ったような心地でした。ところが半年経ち、一年が経ち、だんだん時間が経つうちに最初の感激は忘れてしまいます。いつの間にか空気のようにありがたみを感じなくなってきている自分がいます。

そのことを考えると、苦しみにあうことの意味が少し理解できます。もし苦しみにあうことがなかったなら、私たちは感謝もせず神を捨ててしまうのかもしれませんが、でも、もし苦しみに会うならばだれでも神に「なぜですか」と問いかけることになる。問いかけることで、忘れかけていた神のことを思い起こし、自分はどこから救われたのかをもう一度確認することになるのではないかと。

3) 咎を告白する

このやもめは息子を失ったとき、こう叫びました。18節後半。「あはたは私の咎を思い起こさせ、私の息子を死なせるために来られたのですか。」

この母親は息子が死んだのは「自分の咎、罪」のせいかもしれない。そのような不安をどこかに抱えていたようです。それで、このとき怒りとともにエリヤに訴え、神に訴えます。

この母親とおなじような不安を抱えているかたがいます。家族が病気で苦しむ、思いがけない怪我や事故にあう。子どもが障害を抱えて生まれてきた。こんな目に遭うのは、もしかして自分の罪のためではないか。親が不仲なのは子どもである自

分のせいではないか。大きな震災に遭っ自分だけが生き残ってしまった。そのことで自分を責め続けて苦しんでいる人たちもいます。

やもめは、自分の唯一の生きがいであった愛する息子が死なせてしまいました。親としてどうして助けられなかったのかと自分を責めて一生苦しむことになるでしょう。

4) 咎から救うために

間違っってはならないのは、神はやもめを苦しめようとしているのではない、救おうとされている。そこがこの箇所を理解する出発点です。

問題はどのようにして神は救おうとされるのかでしょう。かめの粉、壺の油が満たされた、よかったね、ではない。実は、それは始まりに過ぎません。あえて息子のいのちを取り去ることで、やもめは自分がどこから救われなければならない者であるかを自覚させられていく。自分の咎から救われなければならない。そこに気がつかせていく。

これは想像になりますが、夫が若くして死ななければならなかったのは、自分の罪のためだったのではないかと、この女性はずっとそのことで自分を責めてきたのかもしれませんが。それがこんどは息子を病気で失うことになる。それまで心の奥底にしまい込んできた恐れと不安が一気に噴き出し、「私の咎を思い起こさせ（るのか）」と叫んだ。

実は、神はこの告白を待っていました。あなたをずっと責めさいなんできた罪は、完全に赦されている。その赦されていることを知らせるためにエリヤは言いました。「あなたの息子は生きています。」こうして罪の赦しをいただいたやもめは告白します。「今、私はあなたが神の人であり、あなたの口にある主のことばが真実であることを知りました。」

5) 救い主を見る

あなたとはだれのことか。もちろんエリヤのこと。でもそれだけか。イエスご自身がエリヤについて語っている場面があります。イエスがご自分の郷里に戻られても、人々がイエスを快く思わなかったときのことです。「誠に、あなたがたに言います。エリヤの時代に、イスラエルに多くのやもめがいました。三年六か月の間、天が閉じられ、大飢饉が全地に起こったとき、そのやもめたちのだれのところにエリヤは遣わされず、シドンのツアレファテにいた、一人のやもめの女にだけ遣わされました。」（ルカ4章25、26節）

これは何を語っているか。エリヤがしたことは、イエスがなさることの前触れである。もっと言えば、エリヤは救い主ではないけれど、やがて来られるイエスの写しのようなものと言っていいかもしれない。ですから、やもめはエリヤの向こう側に救い主を見ていたとも言えます。苦しみは通らなければならなかったけれど、それで救い主を知ることになった。これが神の救いの方法です。

が私たちの救い主であることを覚えていただきたい。主の御名をあがめます。

3 イエス・キリスト

1) 世話になる

エリヤは「私が世話になっている、このやもめにさえも」と祈りました。エリヤがイエスの先駆けの役割をしているのなら、このことばはそのままイエスにもあてはまるはずです。イエスは天から火となって下りてこられ、私たちのところに住まれ、仕える者の姿をとられたと書かれています。仕える者とはなにか。神である方なのに、イエスは私たちの世話になったと言ってくださっているのです。世話になっている人たちがこんな苦しみにあうなどあってはならない。それで主は十字架の上で父なる神に祈ってくださった。「このひとたちにわざわいを下して、愛する者たちを死なせるのですか。そうではない。主よ。どうか、この人たちのいのちをとりもどしてください。」祈っただけではない。そのことを成し遂げるためにご自分のいのちを捨ててくださいました。父なる神は、ご自分のひとり子を十字架でさばかなければならなかったのです。イエスは、愛する父親から十字架で見捨てられなければならなかった。だから神はこのやもめの苦しみもよくご存じなのです。

2) よみがえられたひとり子

死んで終わったのではない。この方は三日目によみがえられました。それは何を意味するのか。今日の箇所からわかる。私たちの罪とかが完全に赦されたことを教えている。

そして、このやもめが教えてくれる大切なことがあります。苦しみあったとき、私たちはどうしたらいいのか。不平不満を言わずにただ信じなさいと言う方もいます。でも、とてもできないときがある。そんな時は正直に叫んでよい。「神の人よ、あなたはいったい私に何をしようとされるのですか。」正直に怒りをぶつけてよい。神はそのことばを待っておられる。「よく言ってくれた」と受けとめてくれる。そうして必ず主は御真実をもって、想像もしていなかった喜びを与えてくださる。それ